

書と詩 12 —書（画、舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・こころ—

画家、詩人や作家の書



正岡子規

1867年（慶応3）～1902年（明治35）俳人・歌人・ジャーナリスト

名は常規
号は子規・瀬祭書屋主人・竹の里人・香雲など54以上あるという。

松山藩の下級武士正岡常尚の次男として愛媛県松山市花園町に生まれる。

母八重は、藩校明教館の教授大原觀山の長女。

1870年（明治3）3歳 妹律生まれる。（明治4）散髪脱刀令・廢藩置県
1872年（明治5）5歳 父が死去（39歳）家督を相続。母と祖父觀山に育てられる。

叔父（父の兄の政房）のもとに手習いに通う。

1873年（明治6）6歳 末広小学校入学
1875年（明治8）8歳 祖父觀山死去（57歳）（明治10）西南戦争

小学校上級頃より武知五友の書を手本に学ぶ。

1880年（明治13）13歳 3月 旧制松山中学に入学 自由民権運動さかん
1883年（明治16）16歳 中学を中退し、叔父加藤拓川を頼つて上京 共立学校に入学。陸羯南に会う
1884年（明治17）17歳 9月 東大予備門に入学（夏目漱石・南方熊楠・山田美妙らと同窓）

『筆まかせ』を起稿する。鹿鳴館時代

1885年（明治18）18歳 『筆まかせ』に「習字」を書く。短歌を始めた。

1887年（明治20）20歳 7月、俳句を大原其戎（旧派）に学ぶ。

1888年（明治21）21歳 8月、俳誌「真砂のしらべ」に初めて俳句が載る。

1889年（明治22）22歳 7月第一高等中学校予科卒業 9月第一高等中学校本科に進級 8月 鎌倉で初めて喀血。ベースボールと寄席に熱中する「七草集」執筆

1890年（明治23）23歳 2月、新聞『日本』創刊。5月、大喀血 初めて「子規」と号す 肺結核と診断されれる漱石と交友がはじまる。夏、碧梧桐にベースボールを教える、翌年虚子にも

教えた。以後碧梧桐と虚子に俳句を教える。【大日本帝国憲法】発布

1891年（明治24）24歳 2月、国文科へ転科。小説「月の都」執筆 写生に開眼。

1892年（明治25）25歳 11月、母と妹を呼び寄せ、上根岸八十八番地に住む 12月、日本新聞社の記者となる新聞「日本」に「瀬祭書屋俳話」を連載 俳句の革新運動を開始

1893年（明治26）26歳 2月、「日本」に俳句欄を新設 3月、帝國大学文科大学を退学 11月「日本」紙

1894年（明治27）27歳 上に「芭蕉雑談」を発表。武知五友死去

1895年（明治28）28歳 2月、上根岸八十二番地に転居 「小日本」創刊、子規が編集責任者となる 中村不折と出会い碧梧桐と虚子が二高を退学して上京 夏、日清戦争勃発

1896年（明治29）29歳 4月、従軍記者として遼東半島に渡るが、2日後に下関条約調印される 5月、帰国途上船中で喀血、神戸病院に入院 7月、須磨保養院で療養後松山に帰郷 松山中学に赴任していた親友漱石の下宿（愚陀仏庵）で静養

1897年（明治30）30歳 10月、再上京 「子規」を俳号とした腰痛歩行困難

1898年（明治31）31歳 1月、子規庵で句会 脊椎カリエスと診断、手術をうける

脛部や背中に穴、膿が流れ出る。床に伏す日が多くなる。

1899年（明治32）32歳 1月、「ホトトギス」創刊 4月、「俳人蕪村」を連載する。

1900年（明治33）33歳 3月、子規庵で歌会 2月、蕪村句集輪講会をはじめる 『歌よみに与ふる書』を発表

1901年（明治34）34歳 10月、高浜虚子が「ほどとぎす」を引き継ぐ

1902年（明治35）34歳 「日本」に『墨汁一滴』を連載 9月2日、日記「仰臥漫録」を書き始める



明治30年
子規庵にて



明治16年
子規16歳

書道 もろもろ塾(15, 7, 19)



明治30年
子規庵にて

『病牀六尺』を「日本」に連載、死の二日前まで書きつづける。『菓物帖』『草花帖』
『玩具帖』に水彩画を描く 9月18日、「絶筆三句」、翌19日、永眠 满34歳
参加

子規と詩書画（山上次郎著『子規の書画』などを参考にまとめてみよう）

子規は、初め、父に手習い（習字）を教わったらしい。その父は、子規が5歳の年、他界した。父の兄の政房は、松山藩の祐筆であつた。この叔父に手習い（お家流）を教わる。6歳から外祖父の大原觀山の私塾で講義を聞き、習字も教わつた。子規8歳の年、祖父は他界した。觀山は大変な西洋嫌いで、断髪令を無視して生涯丁髷を断たなかつたという。子規はそんな觀山を大変敬愛していた。祖父もまた子規をとても可愛がつたといふ。

軸かけて椿活けたる忌日哉（明治32年、觀山の25回忌に子規が詠んだ句）

父や叔父や祖父に可愛がられたのは、幼い子規がたいへん聰明で、字を書くのが好きで、巧みであったからだと想われる。

小学校でも、子規は習字が優れていたらしい。当時の小学校では、毎日一時間、習字の授業があつたようだ。

小学校の上級になつて武知五友の書を手本

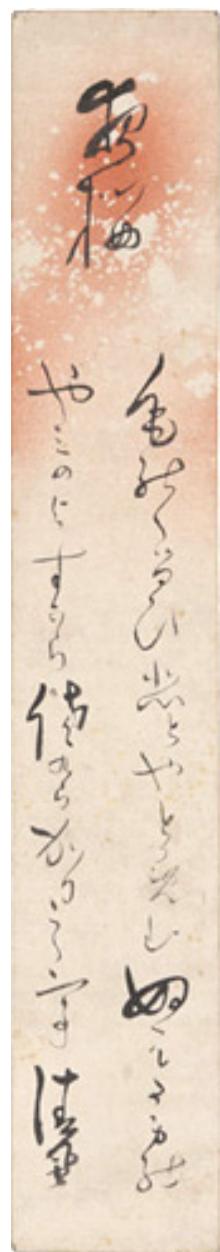
として習字に励んだ。武知五友は、祖父の親友で、明教館で朱子学を教えた、漢学者で詩文・歌・書画に優れていた。維新後は、流行や洋風を嫌い、私塾を開き、閑に暮らした。松山市正宗寺堂内子規は、日下伯巖に学んだ。趙子昂に傾倒した伯巖の書風は松山の書家に大きな影響を与えた。武知五友・大原觀山・河東静溪（碧梧桐の父）は、伯巖の門人。



五友は、子規の才能を愛し、子規の雅号「香雲」の額を書いて与えた。子規はそれを勉強室に掛けて勉学に励んだ。その扁額は、松山市末広町の正宗寺の子規堂の「子規の勉強部屋」に残つている。子規は毎日放課後、山之内伝藏の習字塾でも学んだらしい。

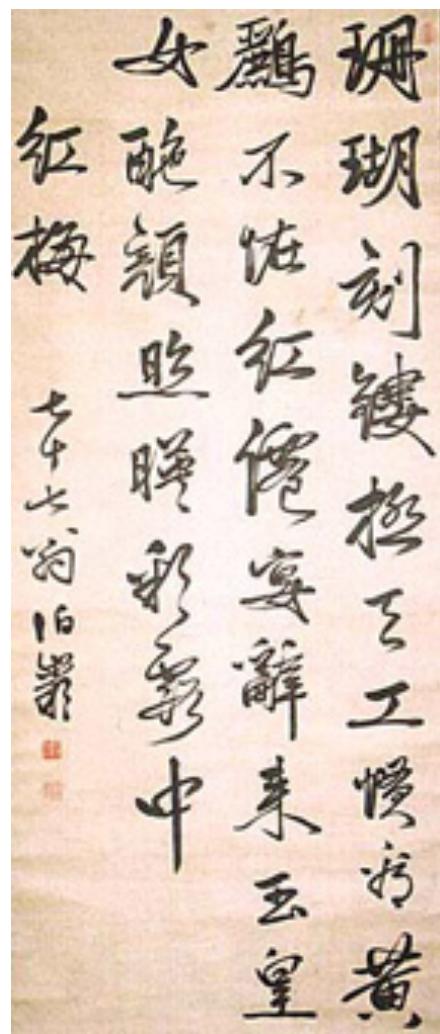
極樂や君が行く頃梅の花（五友の死を悲しんで子規の詠んだ追悼の句）

子規の書には、幼少時から学んだ、趙子昂→伯巖→觀山・静溪・五友→子規と、いうように、継承された師匠たちの書風が現れている。



五友書「夜桜」短冊

夜桜
ものくるひ ひとやとかめむ ぬはたまの
やみのよすからさくらかりして 清風



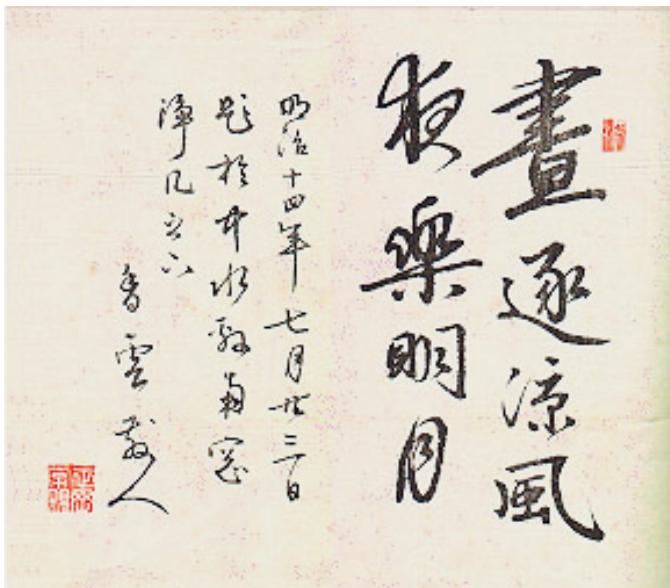
日下伯巖書「行草書七言絶句」133×56 cm

日下伯巖（1785～1866）

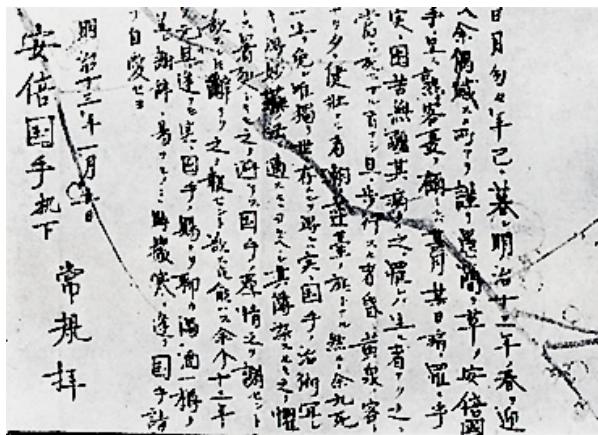
愛媛県松山市出身 朱子学者
松山藩の藩校の明教官教授
名は梁 字は伯巖 号は陶溪



書道もろもろ塾（15, 7, 19）



子規書「帖」明治14年（1881）7月23日 子規14歳 13.5×8 cm
「昼は涼風を逐い、夜は明月を楽しむ。明治14年七月廿三日
題梧中水 南窓淨几之下 香雲散人」



子規書「安倍国手宛書簡」明治13年1月5日 子規13歳
現存最古の手紙と思われる。美しい詩箋に書かれている。
「国手」は医者の敬称。これは安倍医師への礼状。

〔『筆まかせ』『習字』より〕

「他人の書法に模擬せんとすれば始めは必ず拙き字を書くべし、是れ其形を見て其神を見ざるが為なり」



子規書画「近世雅感詩文」の挿絵（寒菊）
明治14年(1881)子規14歳 20.7×14.0cm
国立国会図書館蔵

子規中学生時代の書画。「近世雅感詩文」は漢詩文を編集した回覧雑誌。菊の墨絵と晩香寒翠 香雲の書



子規模写「北斎・画道独稽古」部分 人物描写法
明治11年(1878)子規11歳 16.5×23.8 cm
松山市立子規記念博物館蔵

子規の現存最古の筆跡

子規は、幼少の頃から絵が好きであった。絵を習い画家になりたいと母にせがんだが、許されず、画家になることを諦めた。しかし、絵は生涯描きつづけた。
小学生時代の子規は、友人から葛飾北斎の絵手本などを借りて熱心に模写して絵を学んだ。また漢学者の祖父や祖父の友人たちに育てられた子規は、中国の南宗画を最高のものとする絵画観を持っていた。中学時代や大学時代に描かれた水墨画が残っている。

『筆まかせ』は、子規の隨筆集。

東大時代の明治17年から25年までのことが書かれている。全4編。その中に「習字」と題する文があり、18歳にして、すでに、書の本質について悟っているようである。

「他人の書法に模擬せんとすれば始めは必ず拙き字を書くべし、是れ其形を見て其神を見ざるが為なり」

子規

子規は、明治22年の
偏従新緑暗辺鳴
花落香消惱客情
千古訴冕蜀天子
十年ト乱宋儒生

偏従新緑暗辺鳴
花落香消惱客情
千古訴冕蜀天子
十年ト乱宋儒生

蜀天子十年ト乱宋儒生

蜀天子十年ト乱宋儒生

蜀天子十年ト乱宋儒生

蜀天子十年ト乱宋儒生

蜀天子十年ト乱宋儒生

大は

趙

子規書・漢詩「子規」明治22年(1889)子規22歳 大喀血の翌日に書かれた。

子規は、明治22年の
大喀血のあと、肺結核と診
断された。彼は、余命をあ
と10年と考え、「子規」と
号し、死に抗うかのよう

に、猛烈に活動をはじめ
た。常盤会寄宿舎に「もみ
ぢ会」を作つて句作に熱中

し、明治24年からは「俳句
分類」に着手し、それは後

に『俳家全集』としてまと
められた。小説も書いたり

したが、小説での表現は諦
めたようである。

明治22年の大喀血の翌
日、上の図版の漢詩「子規」

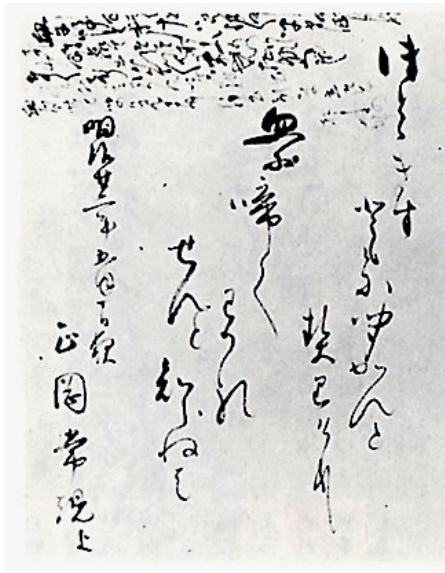
と、歌とを詠んだといわれ
る。

常盤会寄宿舎初代監督
だった叔父の服部嘉陳が、

監督を辞任して、松山へ帰
ることになった時、子規

は、この惜別の歌を詠み贈
つた。

この学生時代に、夏目漱
石や高浜虚子・河東碧梧桐



はとときす
ともに聞かんと
契りけり
皿に啼く
わかれ
せんと知らねば
正岡常規上
明治22年5月10日夜

この学生時代に、夏目漱
石や高浜虚子・河東碧梧桐
らとの交友が始まった。



ユニホーム姿の子規（23歳）
明治23年3月、撮影
結核とは思えない姿である。



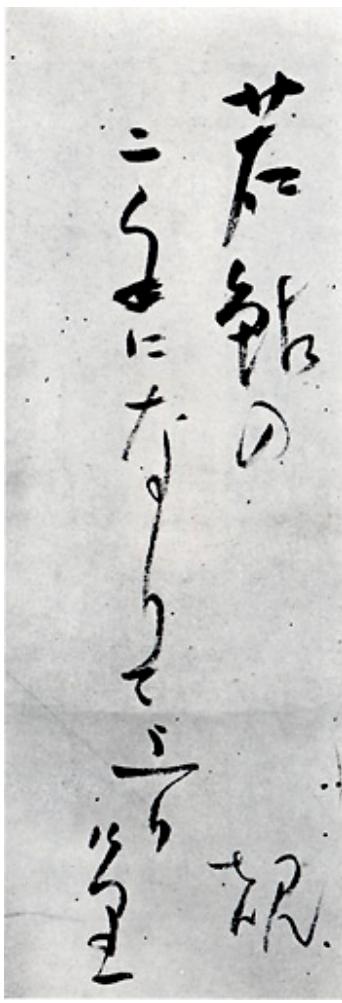
ホトトギス
子規とは、ホトトギスの
異称。他に杜鵑、杜宇、蜀
魂、不如帰、時鳥、などと
表記する。

ホトトギスは、赤い口を開けて啼く様子が
喀血している結核患者に似ているところか
ら、「啼いて血を吐くホトトギス」といわれ、
結核患者の代名詞であった。

ベースボールは明治5年（1872年）頃、開成学校（東大の前身）の教師、H・ウイルソンによつて伝えられたらしい。松山にベースボールを伝えたのは子規といわれる。子規が最も熱中したのは、明治21～22年で、名キャラッチャード（飛球）などこの訳語は子規の発明という。中学生だった碧梧桐や虚子にベースボールを教えたことがきっかけで、彼らは、子規から俳句を習うことになつたらしい。

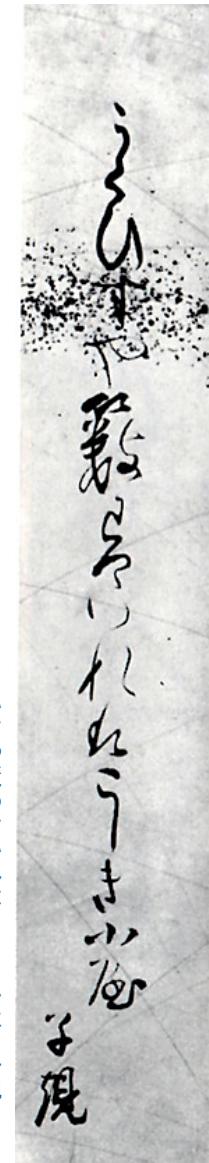
子規から俳句を習
うことになつたらしい。
「直球」「飛球」などこの訳語は子規の発明とい
う。中学生だった碧梧桐や虚子にベースボールを教
えたことがきっかけで、彼らは、子規から俳句を習
うことになつたらしい。

卯の花をめがけてきたか時鳥 子規



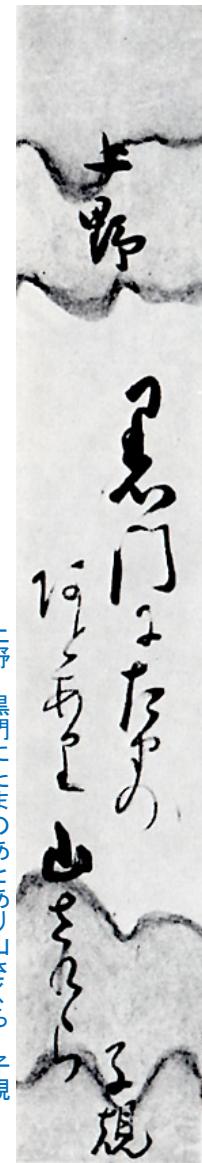
子規書・幅 明治 25 年 (25 歳)
48.5×16 cm

若鮎の二手になりて上りけり
規

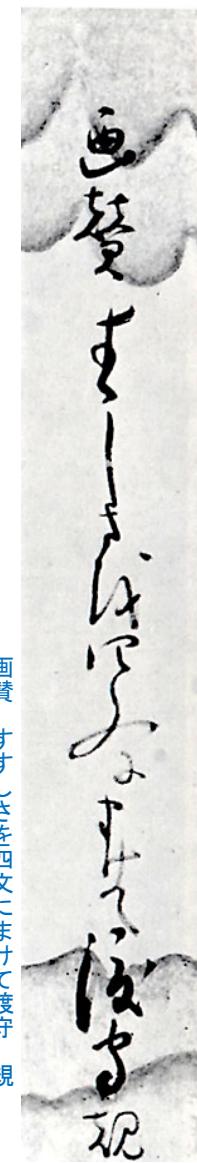


子規書・短冊
明治 25 年 (25 歳)

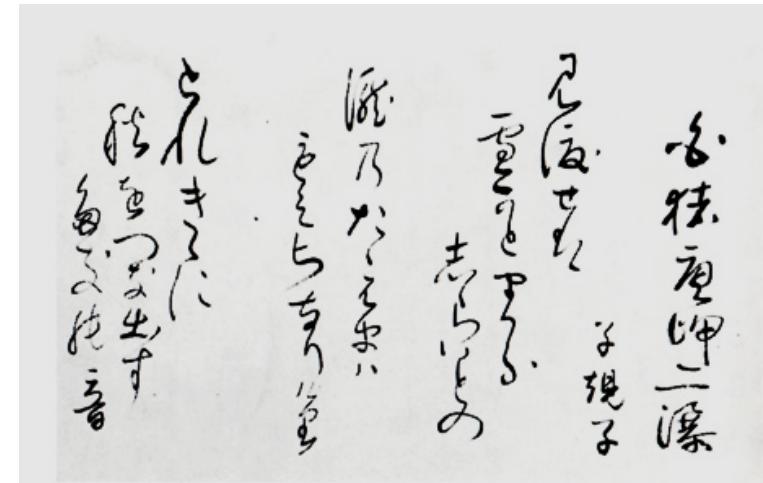
うくいすや箋わけいれはこしき小屋 子規



子規書・短冊
明治 25 年 (25 歳)
子規最初期の短冊



子規書・短冊
明治 25 年 (25 歳)
子規最初期の短冊



子規書「近藤本家の書画帳の書」明治 24 年 (1891) 子規 24 歳

白猪・唐岬二瀧
しらい からかい 二瀧
見渡せば盤
せんとまがふ
雲かとまがふ
志らしいとの
しらいとの

「近藤家にて観瀑の書画帳一覧中に、貴兄の
発句及び歌あり、発句も書も頗る拙の様に思は
れ候。僕此の書画帳を見て貴兄の處に至りて不
覚破顔微笑す。(以下略)」(夏目漱石の手紙よ
り)

この時、漱石は、俳句 50 句を作り、子規に
添削を求めた。子規は、ほぼすべてに朱をいれ、
「初心、平凡、いやみ」「まづい」「非俳句」「巧
ならんとして拙なり」「陳也拙也」などと批評
している。

瀧のたえまは
毛三介里
もみちなりけり
たれきくに
秋をつき出す
多支能
たきの音

子規は、明治 24 年 8 月、帰省の折、白猪・
唐岬の瀧を見物に行き、同地の素封家の近藤本
家に二泊した。上の図版は、その時、部屋の床
の間に置いてあつた書画帳に歌と句を書いた
もの。形式的で平凡な整った書風である。
4 年余り後の明治 28 年 12 月、偶然、瀧を見
物に来て、近藤本家に宿泊した漱石が、この書
画帳を見て子規に宛てた手紙が残っている。

夏目漱石との交遊

子規と漱石とは同年の生まれ。明治17年9月、同時に東大予備門に入学。しかし、交遊は、明治22年1月に始まる。

ふたりの出会いは、子規の作った文芸同人誌『七草集』を読み、感動した漱石が「情優にして辞寡、清秀超脱神韻をもつて勝る」との批評を書いたことがきっかけだった。この時、はじめて漱石は「漱石」と号した。子規が「子規」と号した15日後の5月25日であった。漱石は寄席の話がきっかけで交遊が始まったと言っているが、それが本当のところかもしれない。漱石が、大喀血した子規に丁寧な手紙を送つたことから親友になつたともいわれる。

明治24年 24歳
旅姿の子規（房総の旅）



明治27年 3月 27歳
記者時代の子規



陸羯南



陸羯南



明治24年 24歳
旅姿の子規（房総の旅）



夏目漱石 25歳
明治25年12月撮影

喫茶去

森君清鑒

升生

子規書「喫茶去・森君清鑒 升生」扁額 32.5×76 cm 明治28年（1895年）子規28歳

子規は、明治25年の暮れ日本新聞社に入社した。その少し前に、松山から母と妹を呼び寄せ、上根岸に同居した。社長の陸羯南は書にも優れ、子規は大きな影響を受け、彼の書は明治26、27年に一変している。子規は、明治26年春、東大を退学し、新聞記者、または文筆家として生きる道を選んだ。

新聞「日本」に発表した「懶祭書屋俳話」を皮切りに俳句革新運動ははじめられ、明治28年の「俳諧大要」によつて完成する。明治29年、子規の唱えた新俳句は「日本派」と呼ばれ文壇から認知された。

子規は、従軍記者として、明治28年4月、大連へ向かつたが、上陸した二日後に講和条約が調印され戦争は終わった。子規は一ヶ月ほどの滞在で帰国することになったが、帰国の船中で大喀血し、神戸病院に入院、7月23日に退院し、須磨保養院に移つた。一ヶ月の療養後、8月25日、松山へ帰り、叔父の所に滞在後、漱石の下宿へ移つた。

偶然、漱石は、明治28年4月、松山中学へ英語教師として赴任し、下宿を「愚陀仮は主人の名なり冬籠」と吟じて「愚陀仮庵」と命名していた。そこへ、「桔梗活けてしばらく仮の書斎哉」と子規が転がり込んできたのである。55日ほどの同居で二人は本当の親友になつたと想われる。この間、子規は、友人たちと「松風会」を結成した。また、漱石の筆や墨を遠慮なく使つて、短冊や条幅など多くの書の名作を創造した。二人は競うように書き句を作したという。ここで子規は漱石の書の影響を受けた。

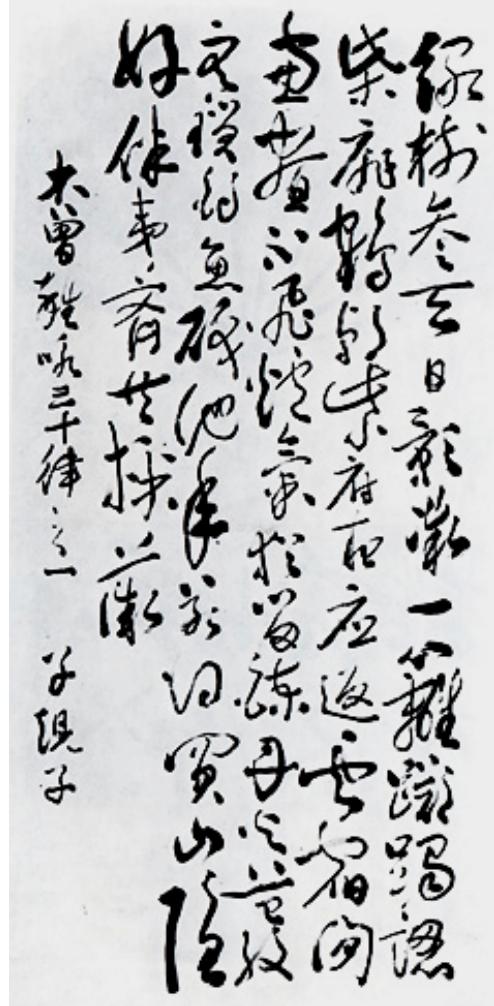
漱石は二階へ、子規は一階に住み、毎晩、子規の友人たちと句会を開いた。10月19日、子規は上京した。「行く我にとどまる汝に秋二つ」子規 帰京の途中奈良に寄つて「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」を吟じた。

漱石は明治29年、松山を去り、熊本市の第五高等学校（後の熊本大学）の英語教師に赴任し、明治33年5月、英国に留学。子規の最期を看取ることは出来なかつた。

「手向くべき線香もなくて暮の秋」漱石（高浜虚子宛 明治35年12月1日）

ゆか枝や流りしやのむすび 子規

子規書・条幅 116×20 cm
明治 28 年



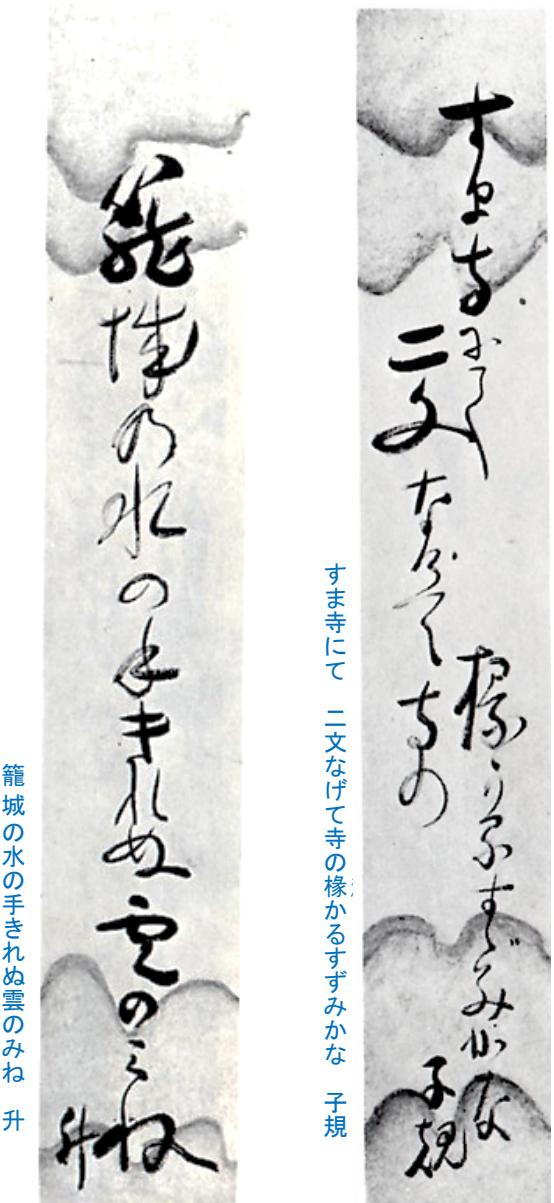
子規書「木蘇雜詠」条幅 69×95 cm 明治 28 年

綠樹參天日影微
一籬躡躅認柴扉
鶴朝柴府夜心返
雲宿間窓昼不飛
爐氣猶留煉丹火
苔紋空鎖釣魚磯
他年若得貢山隱
好伴夷斎共採薇
木曾雜詠三十律之一
子規子

「短冊の認め方に就き要する心得を問ふ。答 心得とて別にあるべくもあらず、只見よきやうに書けば可なり。…注意すべきは、字の位置と、墨の濃淡となり。併し位置は一定したる者にあらねば、一行にも二行にも三行にも、其外何やうにも書くべし。墨の濃淡とても、俳句ではどこで墨つぎするなどいふ事歌の如く定まり居らず。善き加減にはからひて墨をつぐべし」『ほととぎす』明治 31 年 1 月、『隨問隨答十』

「子規自らの発明であらうと思ふが、或時平仮名の書き方に就いて、結構を大きく、ゆつたり、余裕のあるやうに書けと教へた。例へば『い』にしても左右の一画一画の間ゆつたり構へる。『る』にしても最終画の彎曲を十分大きくするといった風に、総ての曲り、結びを大まかにすることによって、書の貧弱味を救ひ得るといふのであつた…この教訓は單り仮名書きのみならず、総ての書体の上に応用、さるべき、永久の金科玉条である」

（碧梧桐『子規言行録』より）

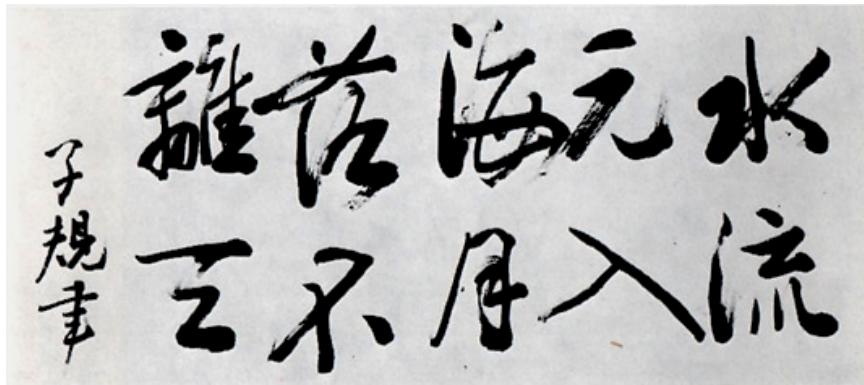


子規書・短冊
明治 29 年

すま寺にて 一文なげて寺の様かるすずみかな 子規

子規書・短冊
明治 28 年

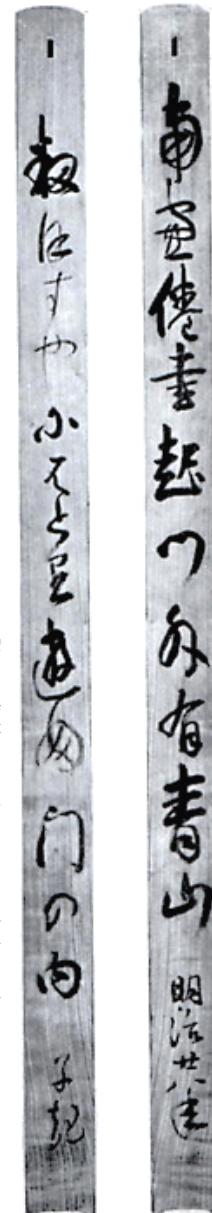
書道 もろもろ塾 ('15, 7, 19)



子規書「水流元入海」78.5×34.5 cm 明治28年

「水流元入海 月落不離天 子規書」

子規書



子規書「聯」178×11 cm
明治28年10月7日

「南窓倦書起つ外有青山 明治廿八年」
「糲ほすやにはとり遊ぶ門ノ内 子規」

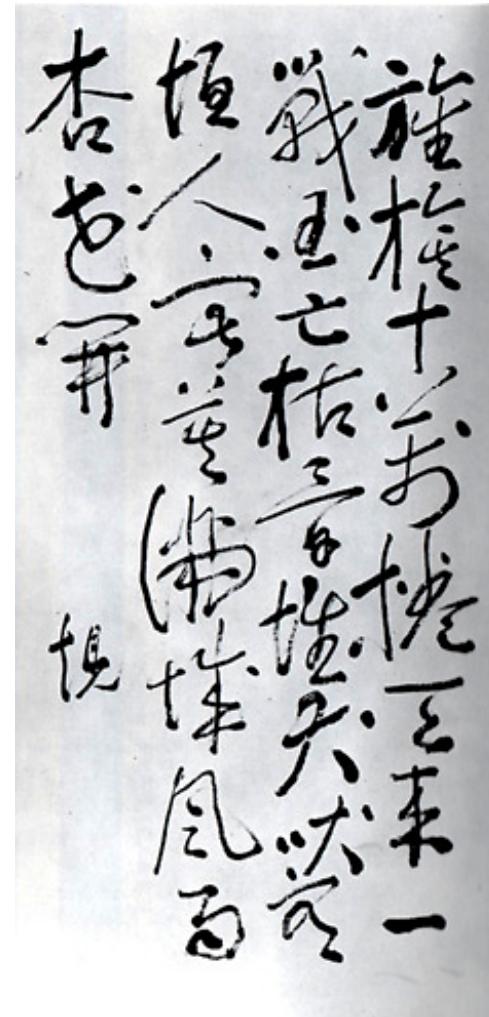
明治26、27年頃、子規の書は、それまでの趙子昂風から一変したようである。陸羯南や愚庵らの影響かとも想われる。漱石の影響も考えられる。

漱石との愚庵での、つかの間の生活は、子規に活力をもたらした。病も癒えて、気分も爽快、希望にみちていた時だったようである。漱石の影響を受けて、この時に書いたものは、すべて、生き生きとして、氣合が入っている。「美の標準は各個の感情にあり」と子規はいっている。

この短期間の作品群は、明るく伸び伸びとして、品格がある。

「この愚庵時代のものは、子規の一つの山とも見られよう」「子規の愚庵での漱石との同居の時代は書の質の上からと同時に量の上から言つても特筆すべき時期であつたといえる」(山上次郎)

しかし、子規と漱石とは根本的に違っていた。子規は常に真剣であり、いのちがけであった。「漱石には文人的な遊びがあるが・・・子規には遊びは許されなかつた・・一筆一筆が辞世とも言えた。」(山上次郎)

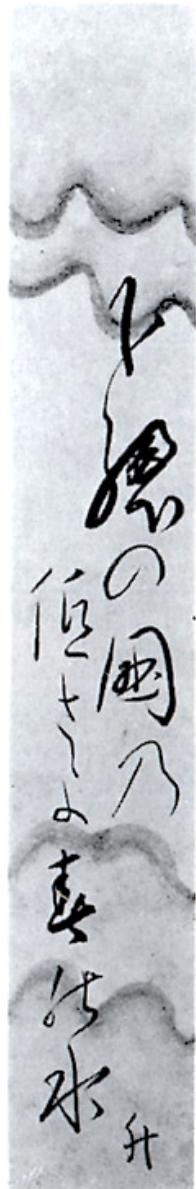


子規書「条幅」78.3×38.2 cm 明治28年

「旌旗十万捲天來 一戰國亡枯骨堆
犬吠空垣人寂寞 滿城風雨杏花開 規」



子規書「条幅」143×40.5 cm
明治28年(1895年)
「数片白雲籠古寺 一条綠水繞青山」



子規書・短冊
明治 35 年

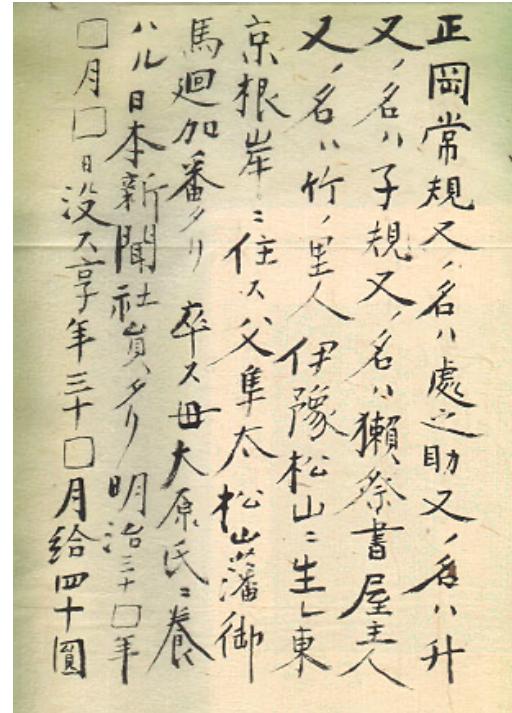
「下総の國の低さよ春の水 升」

河東可全に送った墓誌銘に同封されていた手紙

「アシヤ自分ガ死ンデモ石碑ナドハイラン主義デ、石碑立テテモ字ナンカ彫ラン主義デ、字ハ彫ツテモ長タラシイコトナド書クノハ大嫌ヒデ、ムシロコンナ石コロヲコロガシテ置キタインヂヤケレドモ、萬一已ムヲ得ンコトニテ彫ルナラ別紙ノ如キ者デ尽シトルト思フテ書イテ見タ、コレヨリ上一字増シテモ余計ヂヤ」

この遺言により子規の墓には戒名などなく、「子規居士之墓」と「墓誌銘」が刻まれているだけである。

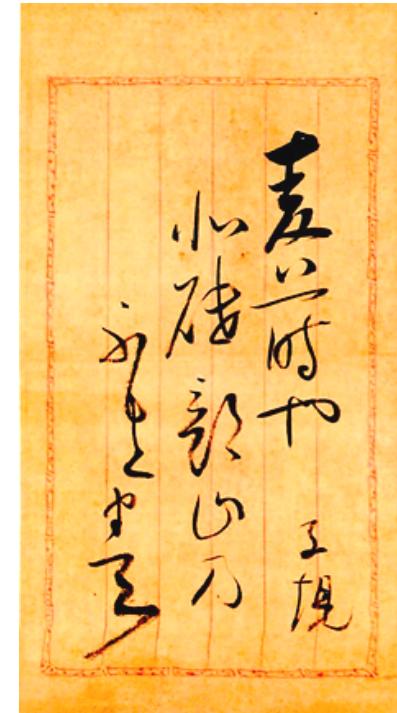
墓は東京都北区田端の大龍寺にある。河東可全は河東碧梧桐の兄である。可全は俳号。本名は鉢。



子規書「墓誌銘」明治 31 年 7 月 13 日、河東可全にあてて送付されたもの。30 余年後に刻された。

「墓誌銘」

正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升
又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人
又ノ名ハ竹の里人伊豫松山ニ生レ東
京根岸ニ住ス父隼太松山藩御
馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養
ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年
□月□日没ス享年三十〇月給四十圓



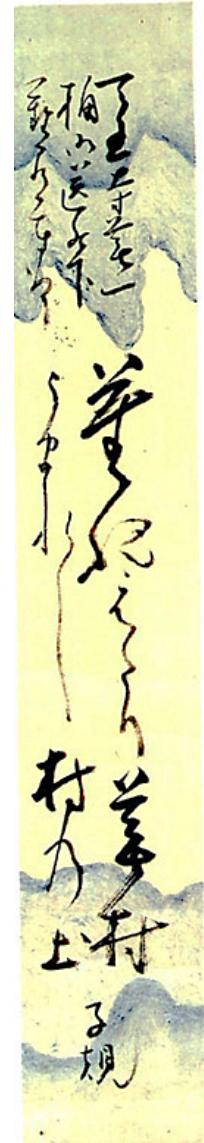
子規書「麦蒔や」
23.0×12.5 cm
明治 28 年?
柿衛文庫蔵

「麦蒔や 北砥部山のふもとまで 子規」

子規は、「俳人の手蹟の巧拙は俳句の巧拙と略々同じ」（明治 31 年『俳人の手蹟』）といい、同書で其角と芭蕉の書について述べている。

「其角の書は縦横跌宕、霸氣筆に溢る。…一代の達筆なり。」

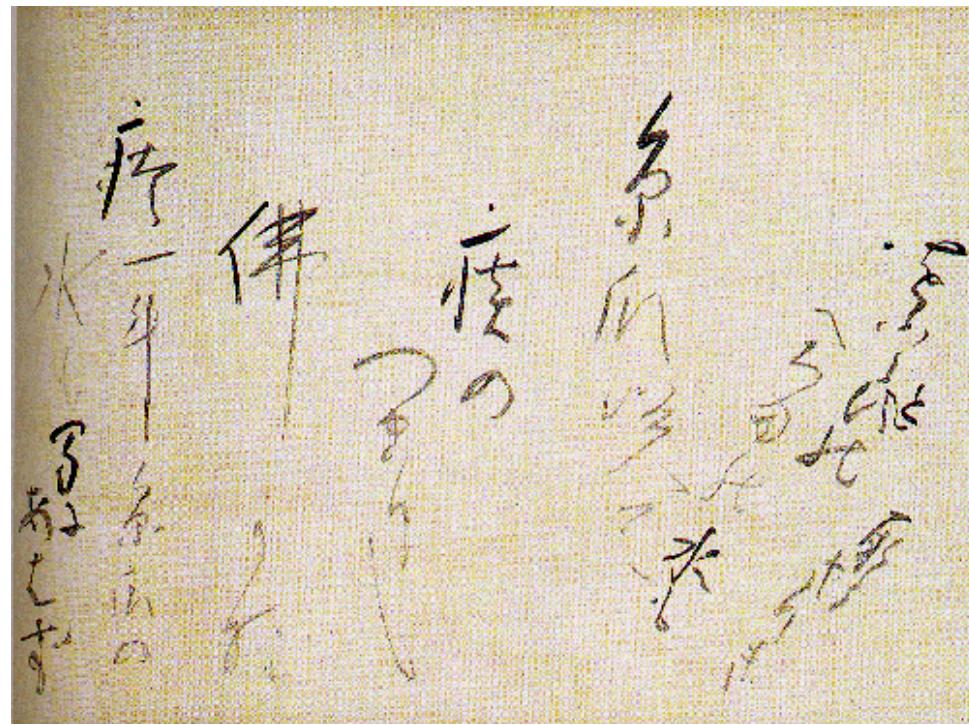
子規の短冊の書は、明治 31、2 年ころからふたたび変わってゆく。これには芭蕉の影響が大きいといわれる。



子規書「蕪肥えたり」
短冊 明治 31 年?
柿衛文庫蔵

書道もろもろ塾 ('15, 7, 19)

「天王寺蕪一 桶御送被下 難有奉存候 蕪肥えたり蕪村 うまれし村の土 子規」



子規書「絶筆三句」1902年（明治35）9月18日午前10時頃揮毫 30.3×44.2cm 国立国会図書館蔵

子規は翌19日の午前1時に永眠した。
子規の命日を、これらの句にちなんで
「糸瓜忌」という。また別号から「獺祭忌」ともいう。

「……予はいつも病人の使ひなれた軸も穂
も細長い筆に十分墨を含ませて右手へ渡す
と……いきなり中央へ糸瓜咲てとす
らすらと書きつけた。……こんど糸瓜咲て
より少し下げて 痘のつまりしまで又た
一息に書けた。……次は何と出るかと、暗
に好奇心に駆られて板面を注視して居ると、
同じ位の高さに 佛かな と書かれたので、
予は見えず胸を刺されるやうに感じた。」（河
東碧梧桐「君が絶筆」より）

糸瓜咲て 痘のつまりし佛かな
糸瓜咲て 痘のつまりし佛かな
糸瓜咲て 痘のつまりし佛かな

「絶筆三句」

子規は死の前日の9月18日の午前10時頃、画板に紙を貼つたものに、仰向けて辞世の句を書いた。紙の真ん中に一句目を書き、左に二句目、右に三句目を書いたという。



子規の手形 半紙大 明治33年8月24日

みほとけの足のあとかた石に彫り歌も彫りたり後の世のため
我手かた紙におしつけ見てあれど雲も起らずただ人にして

「俳諧二百年の間最書を善くする者は松尾芭
蕉なり……徳川三百年間に於て仮名交りの書を
善くする者、1人の芭蕉の右に出づる者無
し。……芭蕉の書は……和様の卑俗にも陥ら
ず、貫之流の平穩にも倣はず、漢字仮字は一種の
調和を成してしかも雅致あり氣力あるを得た
り。」（『俳人の手蹟』）

子規は、青年会津八一から教えられた、良寛の書も絶倫だとほめている。
子規は明治30年ころから書を深く研究したようである。そして、明治31年に芭蕉を、明治33年には良寛を発見した。当時の書壇の書家などすでに眼中になかったのである。

帰京後の子規は、脊椎カリエスと診断され、死が迫つて来るのを感じたが、病に屈せず、俳句に写生文に隨筆に業績を残してゆく。
子規は、芭蕉の書を絶賛した。

伴ひ在る皆難日え釣り我爭跡一失ノ伴へキ

明治卅三年八月廿四日手形



子規画「集物帖」より 西洋リンゴ一 日本リンゴ四 水彩
明治35年6月～8月 9.2×12.0 cm 国立国会図書館蔵



子規画「玩具帖」魚釣り玩具
19.8×17.0 cm 水彩
明治35年8月～9月

「玩具帖」は、子規最晩年の4枚の絵からなる帖。子規没後に正岡忠三郎が帖に仕立てて命名したもの。題簽は高浜年尾の書。この絵には、九月二日（二百十日曇）と書かれている。死の17日前の作。



子規画「草花帖」ハナバショウ
明治35年8月 14.3×17.5 cm
国立国会図書館蔵



子規画「鶏頭画贊」明治34年ころ 縦17.6×17.6 cm 水彩
画贊「鶏頭はまだ下草よ女郎花」

女郎花は描かれていない。

「…子規はこの簡単な草花を描くために、非常な努力を惜しまなかつたように見える。わずか三茎の花に、少くとも五六時間の手間をかけて、どこからどこまで丹念に塗り上げている。これほどの骨折は、ただに病中の根気仕事としてよほど決心を要するのみならず、いかにも無難作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云つても、明かな矛盾である。…東菊によつて代表された子規の画は、拙くてかつ眞面目である。…隠し切れない拙が溢れてゐると思う…子規は人間として、また文学者として、最も「拙」の欠乏した男であつた。…彼のわざわざ余のために描いた一輪の東菊の中に、確にこの「拙」を認める事のできたのは…余にとつては多大の興味がある…」
(明治44年、夏目漱石『子規の画』より)



子規画「あづま菊」1900年(明治33)
37.8×26.0 cm 水彩

熊本にいる漱石に送った絵。
右脇に「是は萎みかけた所と思ひたまへ」
「コレハ萎ミカケタ所ト思ヒタマヘ」
「下手いのは病人だからと思ひたまえ。嘘だと思
はば肱ついで描いて見玉え」と注釈がある。
右上に「寄漱石」として左半分に歌一首を添
えている
「東菊活けて置きけり火の国に住みける君の
帰り来るがね」

「…子規はこの簡単な草花を描くために、

右脇に「是は萎みかけた所と思ひたまへ」
「コレハ萎ミカケタ所ト思ヒタマヘ」
「下手いのは病人だからと思ひたまえ。嘘だと思
はば肱ついで描いて見玉え」と注釈がある。
右上に「寄漱石」として左半分に歌一首を添
えている
「東菊活けて置きけり火の国に住みける君の
帰り来るがね」

「あづま菊」

「草花帖」見返し（序文）

此帖ハ不折子ヨリアツ

カリタリト思フ併シ此頃
ノ病苦ニテハ人ノ書画帖

ナドヘ物書クベキ勇氣
更ニナシ因ツテ此帖ヲモラ

ヒ受クル者ナリ若シ自分
ノモノトシテニ写生スル時ハ

快極リ也又其寫生帖ヲ
海朝毎晩手二取りテ開キ

見ル事何ヨリノ樂ミナリ不
折子欧洲ヨリ帰リ来ルトモ

余ノ病牀ヨリ此唯一ノ樂
(即チ此写生帖)ヲ奪ヒ去

ル事ナカランヲ望ム

明治卅五年八月一日

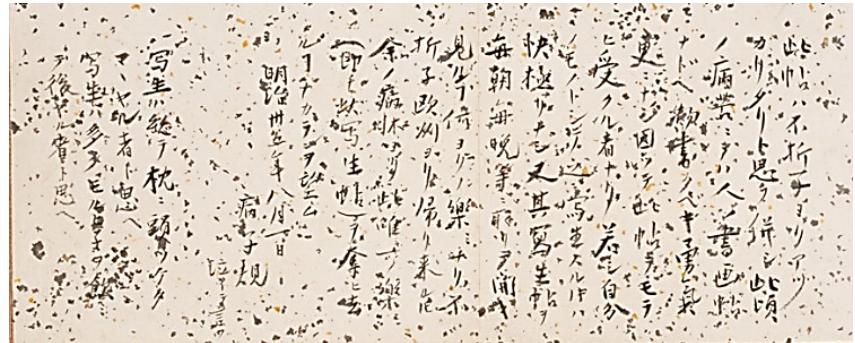
病子規

泣イテ言フ

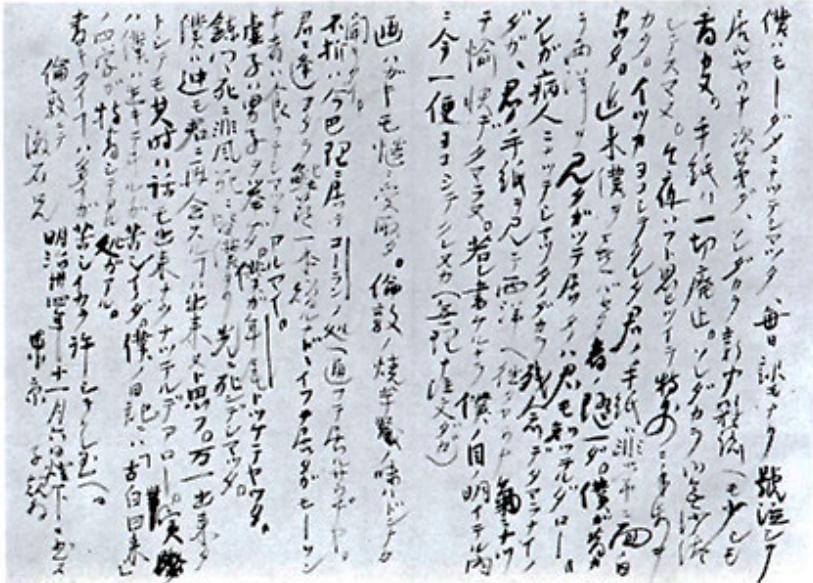
写生ハ總テ枕二頭ヲツケタ
マヤル者ト思ヘ

写生ハ多クモルヒ子ヲ飲ミ
テ後ヤル者ト思ヘ

死の直前に描かれた「菓物帖」「草花帖」「玩具帖」は、文学における彼の持論である「写実」の真髓を絵で表したものである。「草花の一枝を枕元に置いて、それを正面に写生して居ると、造化の秘密が段々分かつて来るやうな気がする。」(子規『病牀六尺』より)



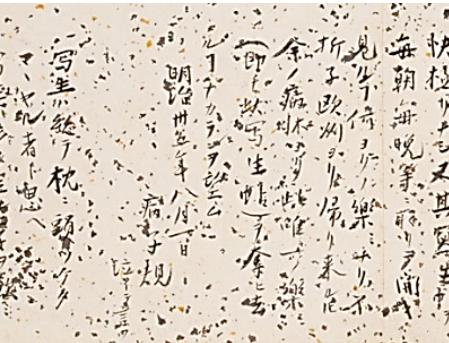
子規書「草花帖・見返（序文）」この画帖は中村不折から贈られたもの。
「草花帖」は、明治 35 年 8 月 1 日～20 日までに草花 17 図を描いたもの。



子規の手紙（千百通以上の手紙が残っている）

子規は、幼いころから絵が好きで、画家になることが夢であったが、母に反対され、専門の画家になることをあきらめた。それでも「自ら楽しまんとならば画の拙なるを憂へず」とい、生涯、絵を楽しんだ。子規 11 歳の時の、北斎作『画道独稽古』の模写が残っているが、すでに、何年も独習した跡が見える。

「余は幼き時より絵を好みしかど、人物画よりも寧ろ花鳥を好み、複雑なる画よりも寧ろ簡単なる画を好めり今に至つて尚ほその傾向を変ぜず」(『病牀六尺』)



子規書「草花帖・見返（序文）」この画帖は中村不折から贈られたもの。
「草花帖」は、明治 35 年 8 月 1 日～20 日までに草花 17 図を描いたもの。



母八重と妹律 大正6年(1917)7月



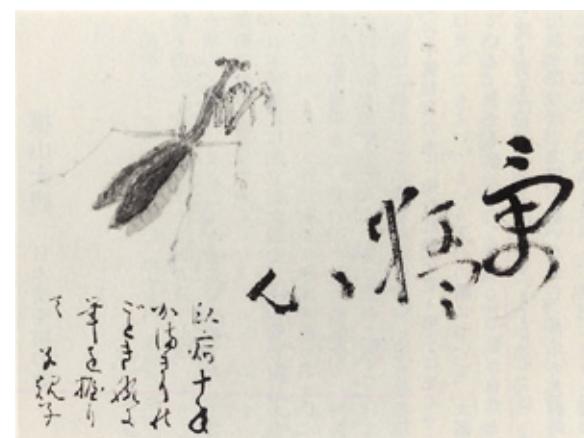
母八重(昭和2年没)



妹律(昭和16年没)



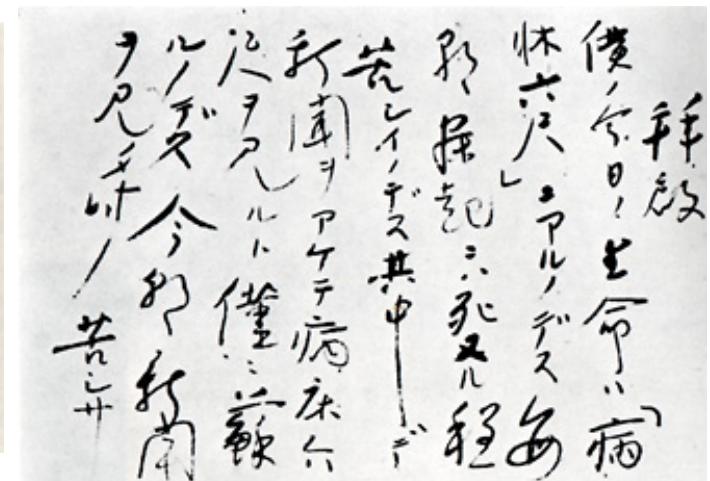
母八重と18歳の子規



子規書・画「かまきりの図・勇猛心」明治35年7月13日

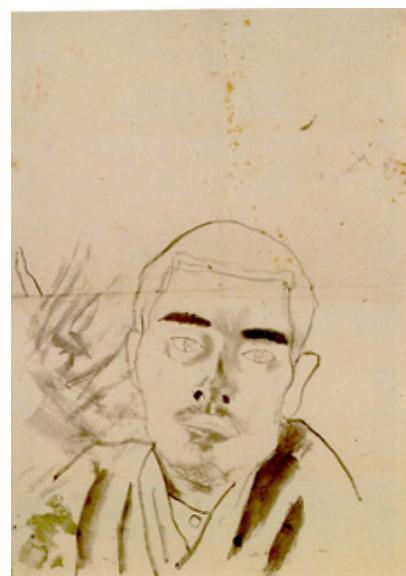
水彩、墨 18.3×25.5 cm

臥病十年かまきりのごとき腕に筆を握りて 子規子



子規書「古島一雄宛書簡」部分 明治35年

日本新聞社の主宰
古島一雄宛の手紙。月日
不詳。
「揮啓
僕ノ今日ノ生命ハ病牀
六尺ニアルノデス每朝
寐起ニハ死ヌル程苦シ
イノデス其中デ新聞ヲ
アケテ病牀六尺ヲ見ル
ト僅ニ蘇ルノデス今朝
新聞ヲ見タ時ノ苦シサ
病牀六尺ガ無イノデス
泣キ出シマシタドーモ
タマリマゼン
若シ出来ルナラ少シデ
モ(半分デモ)載セテ戴
イタラ命ガ助カリマス
僕ハコンナ我儘ライハ
ネバナラヌ程弱ツテヰ
ルノデス」



子規自画像下絵 明治33年 38.4×26 cm



病床の子規 明治33年4月5日

母と妹

子規の晩年、50代の母八重と、二度結婚して二度とも不縁になつた30代の妹律が子規の看病にあたつた。

母八重は夫の死後、裁縫を教え家計を補い二人の子を育てた。上京し、家事をし、子規の看病をし、子規の最期を看取つた。子規を回想して「小さい時分にはよっぽどへぼでへぼで弱味噌でございました」「乳児のころの子規は顔が異常に丸く、見苦しく、鼻も低かつた。体质虚弱で背も低く、内向的だったのでよくいじめられた」という。

妹の律は、明治23年二度目の離婚をして、松山から上京後、献身的に兄の看護をした。子規没後は家督を継ぎ、職業学校に通い裁縫の資格を取り、同校の教員となつた。母の看病のため教師をやめてからも、子規庵で裁縫教室を開き生計を立てながら、厖大な子規の遺品遺墨と庵の管理保存に努め、昭和3年財團法人子規庵保存会初代理事長に就任した。子規の自筆原稿や真蹟類は律の手によつて毎年きちんと虫干しされ、子規庵から一枚たりとも散逸しなかつた。大正3年、従兄弟の忠三郎を養子に迎え正岡家を継承させた。子規は『仰臥漫録』の中で、律を「癪癪持」「強情者」「理屈づめの女」などと罵倒している。



根岸子規庵の庭



根岸子規庵 6畳と8畳の間



根岸子規庵の玄関



真中が子規の墓、右は母の墓、左は律の墓



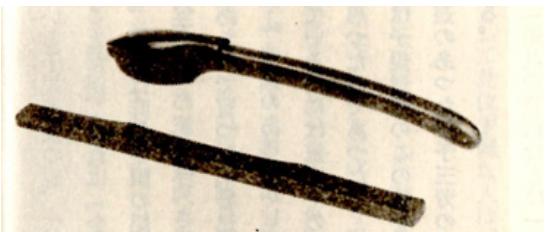
子規愛用の机のレプリカ



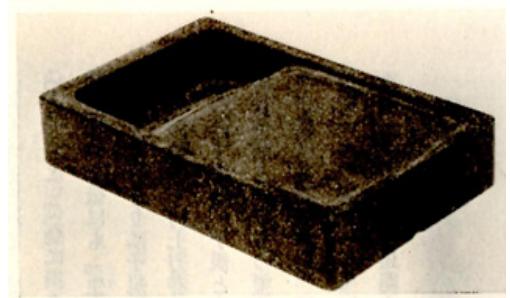
根岸子規庵 6畳の間と机と糸瓜棚



子規が愛用した「金不換」筆



子規遺愛の矢立と文鎮 根岸子規庵蔵



子規遺愛の硯 根岸子規庵蔵



子規

子規遺稿集を虫干しする寒川鼠骨と律

はじめ、子規は、「南画に非ずんば絵に非ず」という絵画観を持ち、反俗で超越的で風流の精神を重んじ、氣韻生動論を信奉していたが、洋画家の中村不折と下村為山に出会い西洋の「写実」「自然主義」に目覚め、「洋画に非ずんば絵に非ず」と大変化する。そのリアリズム芸術觀が子規の文学活動に影響し、俳句・短歌の革新へと進展した。

ヨーロッパ一九世紀自然主義の影響を受けた子規は、現実密着型の生活詠を重視し、言葉遊びや修辞技巧を否定し、古今・新古今集を全否定、万葉集を高く評価した。万葉の詩人以外では源実朝、橘曙覽らを称賛した。

子規の俳句革新運動は、新聞「日本」に発表した『獺祭書屋俳話』にはじまる。彼は俳句の堕落を嘆き、月並を排撃し陳腐と俗氣を嫌悪し、芭蕉の詩情を評価、芭村らを发掘し、芭村の俳句を理想とした。

歌は感激を率直に歌い、自然を写生するもの、そして、使う言葉は「古語」である必要はなく、現代語、漢語、外来語を用いても良い、と主張した。

彼は現在の日常生活を表現する、短くて無駄のない簡潔な詩歌を見つけるために努力し、近現代文学における短詩型文学の方向を決定し、詩歌に革命をもたらした。子規の理論が近代短歌の理論となつたのである。

根岸短歌会主宰、短歌の革新につとめた。根岸短歌会は伊藤左千夫、長塚節、岡麓らにより短歌結社「アララギ」と発展する。

彼は、歌や俳句だけでなく新体詩や小説、漢詩、能、隨筆にも挑戦し、和洋漢、世界のあらゆるものから学んだ。